
午睡（ゴスイ）

鍵屋のカギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

午睡ゴスイ

【著者名】

鍵屋のカギ

【あらすじ】

夢のコメは夢？夢のコメは現実？現実のコメは現実？現実のコメは夢？ - - ぼくは何処に居るの？

ぴちょん…、と何かの滴る音に重なり、夜のしじまのそのまた奥から声がする。

瞼の裏の闇に声が木靈す。^{コタマ}

僕は仰臥したまま、指の先さえも動かせずに瞼の裏の闇を見つめ、木靈す声をぼんやりと聞いていた。

遠く、宇宙の果てから叫ぶ様な。

近く、耳のすぐ傍で囁く様な。

曖昧で捉え処が無く。

夢の中からの様な。

現実からの様な。

確かなことは唯ひとつ。

僕を呼ぶ声、だつたのだ。

呼ぶ声だつたのだ。

『此方^{コチラ}へおいで…』

*

固く閉じた瞼の隙間から強烈な閃光が眸を焼く。視界は真っ赤を通り越して真っ白になつた。痛む眸を開くと、木々の縁が飛び込んできた。圧倒的な生命力に息苦しくなる。

『キテ…』

唐突に、頭の中で声が弾けた。何処かで聞いたことのある様な声だった。

「だれ…？ 誰がぼくを呼んでいるの…？」

「世界樹^{ヨガドラシル}ですよ。先刻も云つたでしょうに。」

「だれ！」

背後から届いた声に、少年は鋭く振り返った。

「誰とは酷い。此処まで一緒に旅をしてきた仲だというのに。」

そこには天鷲絨の外套エプロード マントに絹帽シルクハットという出来損ないの奇術師の様な恰好の男が、いつの間にかひつそりと立っていた。

「…………？」

「酷いですねえ……、須俱理スグリ。お忘れなのですか。萬屋ヨロズヤですよ。『萬の知識を持つ者』ですよ。」

『萬屋』と名乗った男をじっと見つめると、男との出会いから今までの記憶がどつと押し寄せってきた。

そうだ自分はアノ声の主を知りたくて彼を訪ねたのだった。

「ああ、そうだ……。『萬屋』だ。ぼくの旅の案内人。」

「そうです。まあ参りましょう。この森を抜けければ目的地です。」

「うん。」

二人は歩き出した。

『キテ…………』

再び弾けた声に少年の歩みが止まつた。
周りの光も音も総ズバてが消えた。

「声が……」

『キテ…………』

声は段々と大きくなり、途切れだ。

「あつ。」

「また世界樹が呼んでいたのですか？」

「うん……。」

現実に引き戻られ、ぐらぐらする頭を押さえる。

「ねえ、何で世界樹はぼくを呼ぶのだろう?」

「さあ、何故でしょ?」

「何だい。『萬の知識』はハッタリかい。」

「さあ、どうでしょ?」

にやりと萬屋は笑つた。だが直にその表情を引っ込むと、打つて変わつて真剣な表情になつた。

「ですが唯ひとつ確実なことは、世界の中心でこの世界を支える世界樹の声を聞き分けられる貴方は特別だということです。」

「……ッ ぼくは特別なんかじゃない！ ぼくは『普通』だ。けれど特別なんかじゃないんだ！」

「どうしたのです？ 突然叫んだりしなさい。」「…何でもない…」

ばつが悪そうに顔を逸らしたままの少年を、萬屋はじつと見つめた。視線に気付いていながらも、少年は顔を上げることが出来なかつた。

「……。」「……。」「……。」「……。」「……。」

一人の間に沈黙が落ちた。数呼吸分の間の後、先に口を開いたのは萬屋の方だつた。

「世界樹を囲むこの森が『知識の森』と呼ばれていると話しましたね。この森もまた特別なのです。」

特別という言葉に、少年はびくんと反応した。それでも顔は伏せたままだ。

構わず萬屋は続けた。

「この森は世界樹の泉からの水を得て、森となつたのです。ですからこの森に生きづく木々の一本、枝の一本、葉の一枚、花の中の雌蕊の一本に至るまで総てに知識が詰まっているのです。」

萬屋は手近な樹から実をもぎ、少年の方へと見せた。

「これが何だか分かりますか？」

少年は少し顔を上げて萬屋の手の中にあるものを見つめた。
それは黄水晶(シャンクリン)で出来た実であった。

萬屋はもうひとつ実をもいで、果実同士を打ち合わせ、小さな破片を少年へと差し出した。

「智慧の実ですよ。お喰べなさい。」

「……」

受け取りもせず、少年は破片を凝視した。

「お喰べなさい。」

自分の分の破片を抓み、口の中に放り込むと、萬屋は再び破片を差し出した。

「さあ、貴方もお喰べなさい。」

「……」

ちらりと萬屋の顔を見上げる。

何処か捉え処のない萬屋の笑顔。

それでもそろりと手を出すと、こいつと破片が乗せられた。

「甘い……。ドロップスみたいだ……。」

思い切って口に含むと、何処か懐かしい味がした。

*

ぱつ、ぱつ、と何かの滴る音がする。

僕の意識はゆっくりと夢から浮上してゆく。

「……」

ぱおつと天井を見上げる。意識がまだ完璧には現実に戻つてこない。

「…………夢…………？」

ゆっくりと左手を顔の前まで持ち上げたものの、ぱたりと力を失い、顔を覆うように手が落ちた。

「はは……、そうだよな……。僕が立ち上がる訳ないものな……。」

空しい声が暗闇に響く。

またぱつ、ぱつ、と何かの滴る音が聞こえる。ああ、あれは点滴の落ちる音だ。

僕を現実に繋ぎ止める鎖。

生れた時からずっと、そしてこれから病に負けるまでずっと、僕と共ににある音だ。

『キテ ……』

アノ声が聞こえた。

顔を覆う手を少しずらし、暗闇の中、耳を澄ませる。

「声……？ またあの声なのか……？ 何で今、聞こえるんだ……？」

不思議な眠りの波が僕を再び夢の世界へ引き摺つてゆく。僕はすうっと眠りに落ちた。

*

一本の細い柳の樹の周りを囲む先程喰べた黄水晶の様に澄んだ泉の前に、二人は立っている。

「漸く着きましたね、須俱理。」こじが『世界樹の泉』です。さあ、御覧なさい。あすこに見えるのが世界樹ですよ。」

「あれが世界を支えている…だって…？ どう見たって無理な話だろ？」

「おや、姿形だけで性急に判断を下すとはいけませんね。」

「そんなこと云つたつて…。」

「まあ仕方のないことでしょう。確かにこの樹は見た目に弱々しい。そしてその中に宿る魂も又弱々しいのです。そら、御覧なさい。このモノの真実を。」

萬屋が外套を翻し、柳の樹に翳すと、次の瞬間、柳のあつた処には少女が虚ろ眸で座り込んでいた。

「女の子…？ ぼくを呼んでいたのは君なのかい！！」

「そう。世界樹に捧げられ、世界樹の魂となつたこの娘は、ひとりこの世界を支えることに恐怖し、貴方を呼んでいたのです。誰か助けて、とね。」

高くなる少年の声とは逆に、低くなつた萬屋の声がそう告げる。

「何で、そんなことまで知つていいんだ…？」

少年は不審の眸で絹帽で表情の見えにくい男を見た。唯一見える

のは彼の口元だけ。その口元は緩い笑みの形に吊り上げられている。背筋に冷や汗が流れるのを少年は感じた。

「全ての答はこの娘が握っています。さて、私がご案内出来るのは此処まで。あとは貴方次第ですよ。」

萬屋は外套を自分へと翳し、瞬きする間もなく、外套が型を失つて地面へと落ちた。中から飛び出したのは、萬屋の外套と同じ色をした真っ黒な鳩だった。

「只これだけは云つておきましょう。この娘が貴方を呼ぶ限り、貴方は貴方に戻れない。ではまた何処か違う場所で、お逢いしましょう。」

鳩はそれだけ云つと優雅に空高く舞い上がった。

「萬屋！」

『 タスケテ…。ここカラダシテ…。』

頭に直接響く声が混乱の極致にある少年の脳裏に響いた。

「五月蠅い！」

少年は耳を塞ぎ、後退さつた。だがいくら距離をおいても声は追いかけてくる。

『 ダシテ…。』

「黙ってくれ！　ぼくにどうしろといふんだ！」

世界樹の魂だという少女に向かつて、少年は怒鳴った。

『 タスケテ…。』

「やめてくれ……自分で出てくればいいだろ？」

『 ……イイノ？　出てもイイノ…？』

脳裏に響く声の響きが変わった。

「勝手にすればいい！　何故そんなことでぼくを呼んだんだ。」

『 だつて、世界が崩れてしまうモノ。代わりになつてくれなくチャ。』

『

また一步、少年は少女から離れようとした。だがそれは叶わなかつた。

いつの間にか少女は少年の手首を握り締めていたのだ。

『貴方は来てくれた…。ねえ、代わりになってくれるのでしょうか…?』

ぬるりとして冷たい手。人としての体温を全く持たない、人ならざるモノの手だった。

「放せ！」

ゾツとなり少年は乱暴に手を振り払おうとした。だががっかりと掴まれた手首が痛むだけで、少女の手が緩むことはなかった。

少女は笑みを浮かべた。

「何故？ 貴方はもう駕籠の中。ふふふ、さよなら。私はもう自由。貴方は駕籠の鳥よ。」

見ると、少年と少女の立つていた位置が逆になっている。その上、泉が水の柵となっている。

少女は柵の外。

少年は柵の内。

囚われたのは少年の方。

『待て…！ これはどういふことだ！』

柵に取り付き、水の柵の間から目一杯腕を伸ばし、少年は怒鳴った。

少女は更に笑みを深め、見つめるのみ。

「有難う。そしてさよなら。」

少女は小さく手を振ると、暗闇の中の一本の道を走り出した。少年は辺りが暗闇に閉ざされることにその瞬間やつと気付いたのだった。

「これは何だ。」「ぼくはどうなる？」「ぼくは、ぼくは…、ぼくは…！」

『待て、待つんだ、待つてくれ！ イヤだ！…！』

*

瞼の裏に柔らかい光を感じて眸を開く。頭上から射す木漏れ日が優しく少年を包んだ。少年は自分が合歓の樹の下で寝ていたことに気付いた。

まだ頭がしつかりと働かずぼんやりとしていると田の前に影が落ちた。

「いい夢、見れたかい？」

目線を上げると、級友である男の姿がある。

「ああ…、そうか。ボクはこんなところで寝てしまったのか……」

「さあ、そろそろ午後の授業が始まるよ。午後一番は君の大好きな地学の授業だ。」

その言葉に少年は完全に眸が覚め、飛び起きた。

「そうだった！ ボクは先に行くよ。じゃあまたあとで。」

遽しく少年は走り去った。その背を少年の級友である男が、ひとり合歓の樹ネムに下から見つめている。男の顔ににやりとした笑みが浮かび上がる。

「須俱理、此処に居れば君に迫る病の足音は届かない。さあ、今度こそは一人だけ。邪魔者はもう消えた。

……いい夢にしよう。」

終

(後書き)

初投稿です。此処まで読んで戴いて有難い「JRC」ます！ 感想・ご意見など有りましたら、じゅんじゅんお寄越しあり！――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7288f/>

午睡（ゴスイ）

2011年1月27日08時48分発行